

(2) スクレイパーの生産

平面形が台形で、広幅の剥片末端を刃部とし、対向する狭幅の辺を背部とするスクレイパーが複数出土している（174・175・179・180・329）。このスクレイパーの両側縁は折り取られているケースが目立つ。石理方向が背面、腹面どちらかに沿わず、刃部に対して直交することから、これらのスクレイパーの素材は金山型剥片ではないようだ。工程の復元にまでいたらなかったが、こういったスクレイパーを念頭に置いた素材剥片獲得技術を東坂元北岡遺跡が有していた蓋然性は高い。

(3) 石鏸・石錐の生産

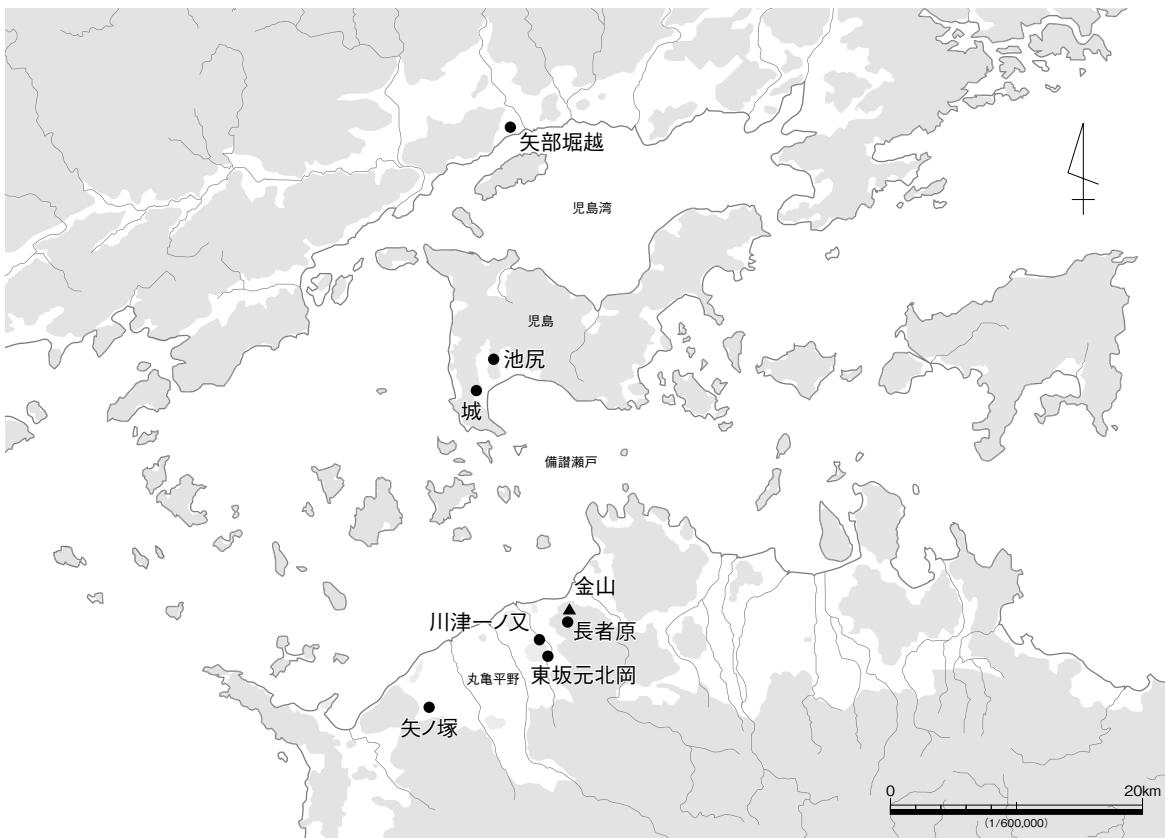
点数は多くないが、石鏸や石錐の製作途中品も出土している。これら小型品の素材は両極打法によって得られる剥片とみられ（上峰 2012）、東坂元北岡遺跡では両極打法での剥片作出と、石鏸・石錐の生産が確実である。第1節で触れたように、金山型剥片剥ぎ取り後の残核は両極打法の石核にもなったとみられるうえ、それ以外の両極打法の石核も存在する。これらの石核から得られる剥片を元に石鏸や石錐が製作されていたのだろう。

第3節 原産地金山と周辺地域におけるサヌカイト製石器の状況

1 サヌカイトの移動と加工

第2節では、東坂元北岡遺跡において、工程1で得られた板状石核、または板状石核に多少の加工を施したもの（工程2-1を終えたもの）を持ち込んで打製石庖丁を生産し、加えて打製石剣やスクレイパー、石鏸、石錐も製作していたことを明らかにした。東坂元北岡遺跡に搬入された板状石核は、原産地の金山付近で加工された蓋然性が高い。一方、東坂元北岡遺跡で生産された打製石庖丁や打製石剣などの完成品は別の集落に運ばれたと考えるのが自然だ。打製石庖丁や打製石剣を受け入れる集落では、完成品を再加工することはあっても、素材から完成品にまで仕上げるケースは少ないと考えられる。すなわち、原石から完成品にいたるまでには、サヌカイトが移動しながら複数の集落で加工され、さらには完成品の再加工も別の集落によってなされることになる。この場合、持ち込んだサヌカイトの状態と加工の目的によっては、集落ごとに剥離技術が異なる可能性もある。本節では、原産地である金山の遺跡と、原産地から離れた複数の遺跡から出土したサヌカイト製石器を検討することで、それぞれの遺跡における剥離技術の相対的なあり方を確認しておきたい。

本節での検討対象資料として、東坂元北岡遺跡に加えて、長者原遺跡、川津一ノ又遺跡、矢ノ塚遺跡、城遺跡、池尻遺跡、矢部堀越遺跡出土のサヌカイト製石器を取り上げる。これらの遺跡からは剥片やチップを含む資料がかなりの点数で出土しており、恵まれた資料数を活かしての定量分析が可能と考えるためである。小剥片も検討対象とするが、こういった資料は報告書に掲載されていない場合が多いため、所蔵機関の協力を得て未報告資料の剥片の数量・重量を計測した（註1）。以下、検討対象遺跡の概要を記す。



第44図 関連遺跡位置図

長者原遺跡（香川県坂出市）

金山南麓中腹の谷に挟まれた緩斜面に立地する。遺構は堅穴住居と推測される弧状の掘り込みが確認されているのみである。遺構に伴わない包含層中から多量のサヌカイト製石器と少量の弥生土器が出土している。弥生土器は中期後葉（中期Ⅲ）に限られるため、石器も同時期と考えていいだろう。

川津一ノ又遺跡（香川県坂出市）

丸龜平野東部を流下する大東川左岸、金山から南西約1.5kmの場所に位置する。一角に弥生時代中期中葉（中期Ⅱ）の堅穴住居数棟と掘立柱建物が集中し、その周囲に走る溝（SD59/100）や近傍の低地部から多量のサヌカイト製石器が出土している。後期後半の資料を除けば、弥生土器の時期は中期中葉に限定されるため、石器は中期中葉の遺構に伴うとみて間違いないだろう。

矢ノ塚遺跡（香川県善通寺市）

丸龜平野北西部、金山から約14kmの場所に位置する。弥生時代中期中葉～後葉（中期Ⅱ～Ⅲ）の集落で、堅穴住居と掘立柱建物が点在する。サヌカイト製石器は遺構や包含層からまんべんなく出土している。

城遺跡（岡山県倉敷市）

備讃瀬戸北岸、児島南西部の小高い丘陵上に立地する集落で、金山からの直線距離は約20kmである。尾根上を中心に弥生時代中期後葉（中期Ⅲ）の堅穴住居が展開する。包含層からサヌカイト製石器が多

く出土している。

池尻遺跡（岡山県倉敷市）

児島西部、現在の児島市街地に向かって開ける谷の奥部に位置する。確認されている遺構はわずかだが、包含層から多量の弥生土器とサヌカイト製石器が出土しており、付近に集落があるのはほぼ確実である。弥生土器は中期後葉（中期Ⅲ）を主体とし、中期中葉（中期Ⅱ）までの幅をもつ。弥生土器はこの時期に限定されるため、石器の時期も中期後葉を中心とする中期中葉～後葉とみていいだろう。

矢部堀越遺跡（岡山県倉敷市）

児島湾北岸の標高 20m 前後の丘陵斜面に立地する集落である。20 棟近い竪穴住居が確認されており、遺構や包含層から多くの石器と土器が出土している。土器は中期後葉（中期Ⅲ）であるため、石器も同時期とみたい。

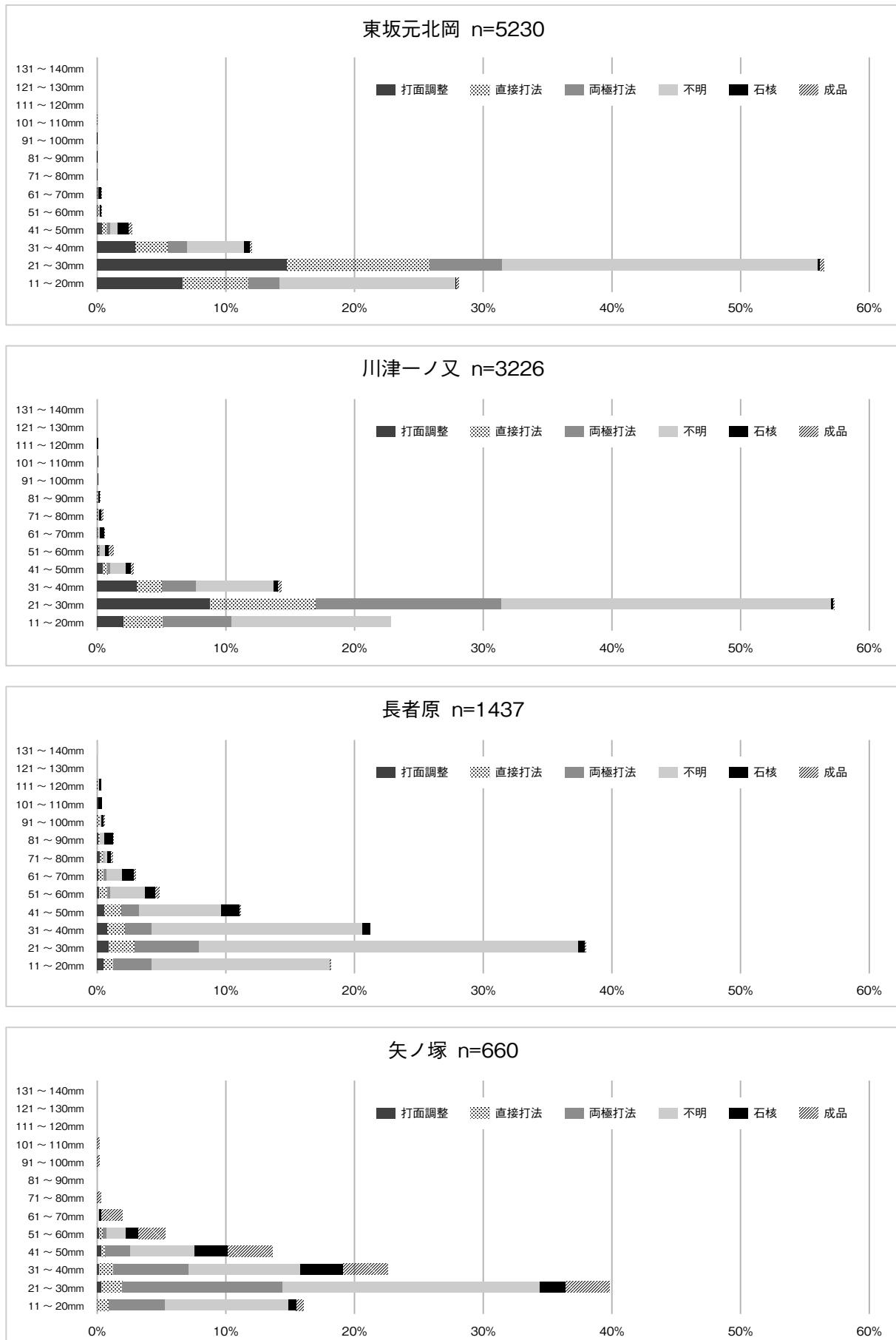
2 遺跡間における石器のサイズと打撃法の比較

(1) サイズと打撃法の比較

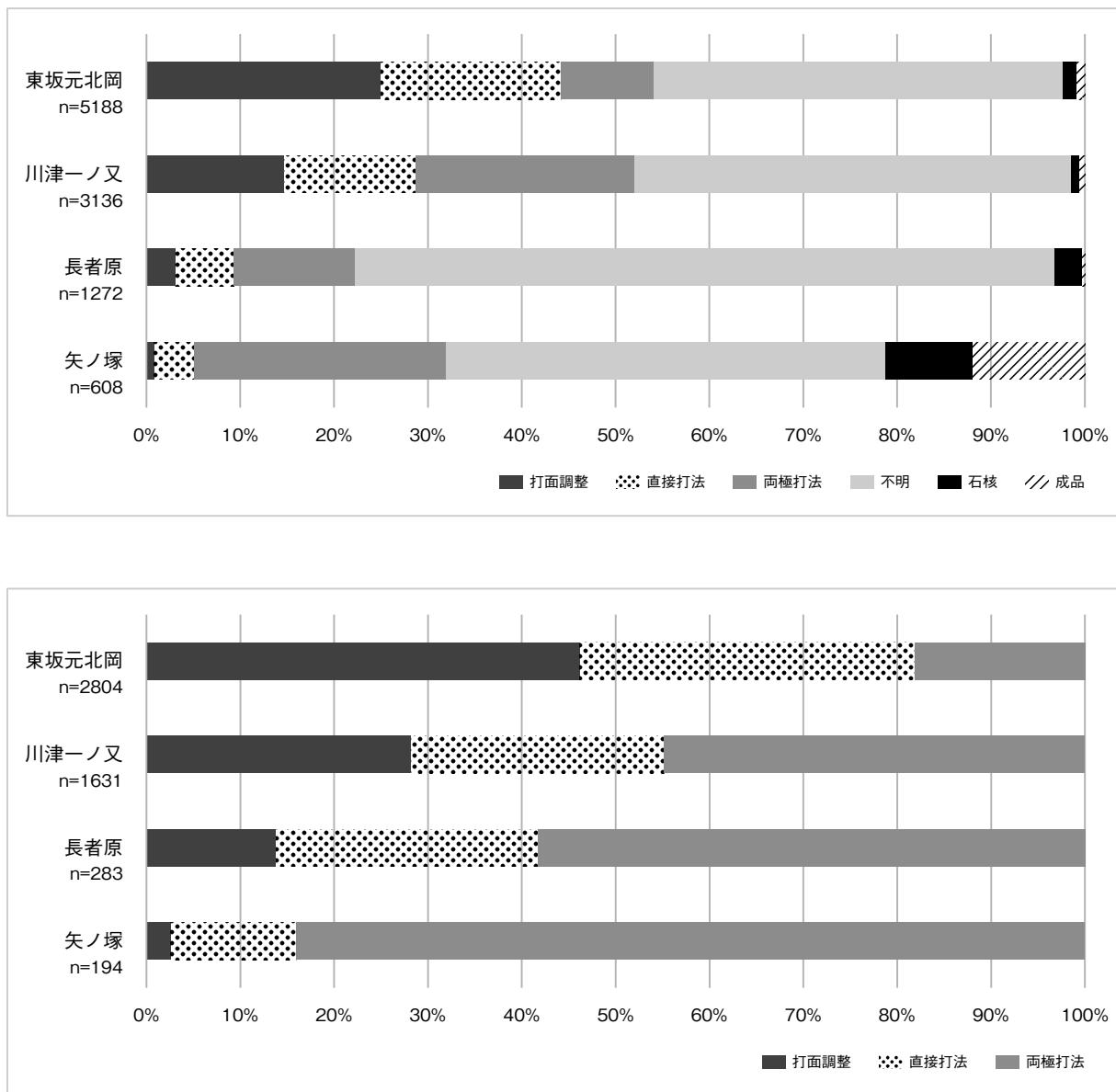
遺跡間での石器製作手法（石器、石材への加工手法）の差異をみるために、各遺跡から出土したサヌカイト製石器の完成品、製作途中品、剥片、問わず分析対象とした。分析対象の石器をまず、「剥片」、「石核」、「成品」に分類した。剥片については、上峯（2012）に示された分類と打撃法の同定の図に基づいて、「直接打法」と「両極打法」に細分を試みたが、打面が残っていない、または末端形状が判明しないものについては「不明」とした。「直接打法」による剥片のうち、金山型剥片剥離技術の工程 3-1 によって生じたと推測される小剥片を「打面調整」として抽出した。「成品」には、石庖丁や石鏸などの定型化した道具の完成品に加えて、製作途中品や加工痕のある剥片、使用痕のある剥片も含める。なお、長さ 10mm 以下の剥片については検討対象から外した。小剥片やチップは調査精度によっては見落とされる場合もありうるが、こういった調査成果物と、土壤の水洗選別により得られた多量の小剥片やチップを有する資料とを比較しても有意なデータは得られない。以上の状況をなるべく回避し、発掘調査により出土した現存資料をより近い条件で扱うため、便宜上 10mm を超える資料について検討する。

第45図は石器の 10mm 単位での度数分布の割合を示したグラフである。度数ごとに分類の内訳も表している。東坂元北岡遺跡と川津一ノ又遺跡では 21～30mm の石器が 50% 以上を占め、11～20mm も含めると 80% 程度になる。東坂元北岡遺跡では 30mm 以下の 4 割以上を「打面調整」と「直接打法」で占める。長者原遺跡でも 21～30mm の割合が最多ではあるが、比率は 40% 以下にとどまる。東坂元北岡遺跡や川津一ノ又遺跡に比べて 31mm 以上のサイズが多く、71mm 以上の石器も少量ながら存在する。矢ノ塚遺跡も東坂元北岡遺跡や川津一ノ又遺跡に比べて 21～30mm のサイズが少ない点など、11～50mm では長者原遺跡に近い度数分布を示す。一方、分類別の内訳を見ると矢ノ塚遺跡では長者原遺跡に比べて「成品」の比率が高く、両極打法の占める割合もやや高い。

次に、遺跡内で行われた打法・工程をより明確にするため、11～50mm の資料に限って石器の種類別比率を出した。サイズが大きなものは、「剥片」や「石核」とはいえ、現状（出土状態）が遺跡に持ち込まれた状態と同一の可能性も十分にあり、そうであればこれらは遺跡内では加工されていないこと



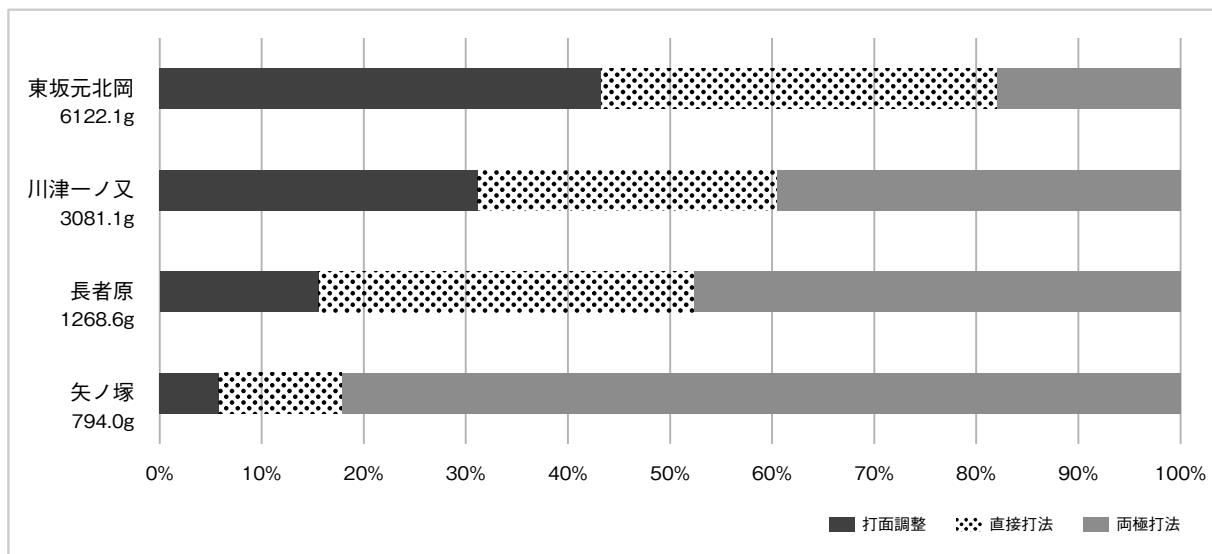
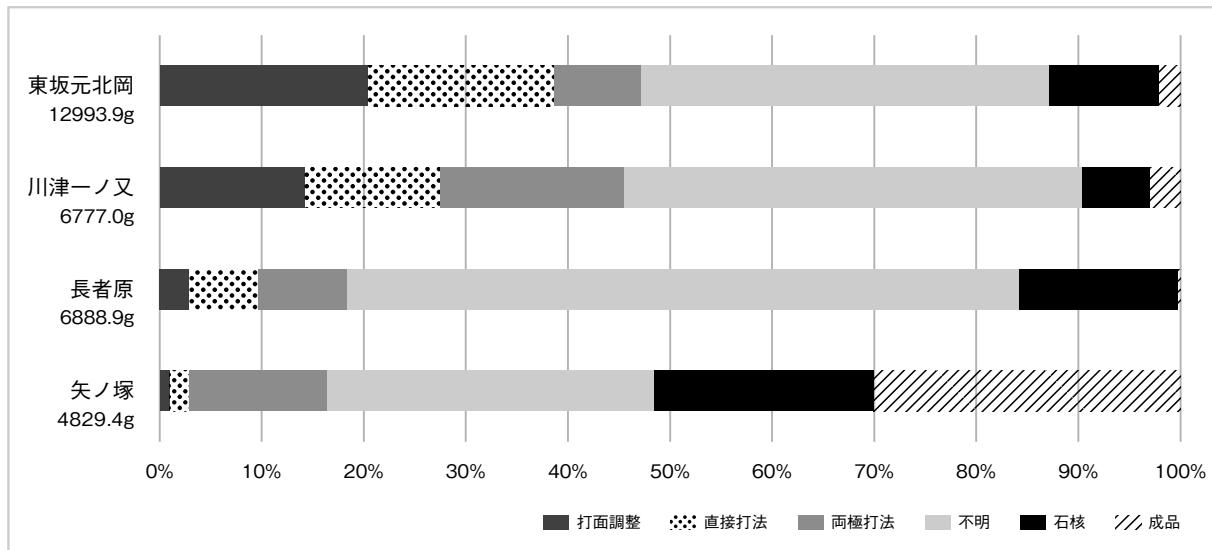
第45図 石器サイズ別数量比(11mm ~)



第46図 石器分類別数量比(11～50mm)

になる。この可能性をなるべく排除するために、対象資料の線引きを 50mm とした。10mm 以下の資料を扱わないので前述のとおりである。この方針に基づいて東坂元北岡、川津一ノ又、長者原、矢ノ塚の各遺跡の内訳を示したのが第46図のグラフである。上段はすべての分類ごとの比率、下段は遺跡内での打法の特徴を鮮明にするために「不明」、「石核」、「成品」を除いた比率のグラフになっている。上段から順に見てみよう。まず、4 遺跡とも「不明」が多数を占めている。東坂元北岡、川津一ノ又、矢ノ塚の各遺跡では 40% 前後だが、長者原遺跡では 70% 強と「不明」が突出している。また、矢ノ塚遺跡の「石核」、「成品」の比率の高さが目立ち、長者原遺跡の「石核」も東坂元北岡遺跡や川津一ノ又遺跡よりはやや多い。「成品」の占める割合は長者原遺跡がもっとも少ない。下段では、東坂元北岡遺跡、川津一ノ又遺跡、長者原遺跡、矢ノ塚遺跡の順に「打面調整」、「直接打法」の比率が減少し、「両極打法」の比率が増加する。「直接打法」に比べて「打面調整」のほうが遺跡間の差異はより顕著である。

さらに、数量に加えて重量でも同様の比較を試みた(第47図)。重量比較では「石核」、「成品」の割合が大きくなっているが(上段)、これは、「石核」や「成品」1点あたりの重量が「打面調整」、「両極



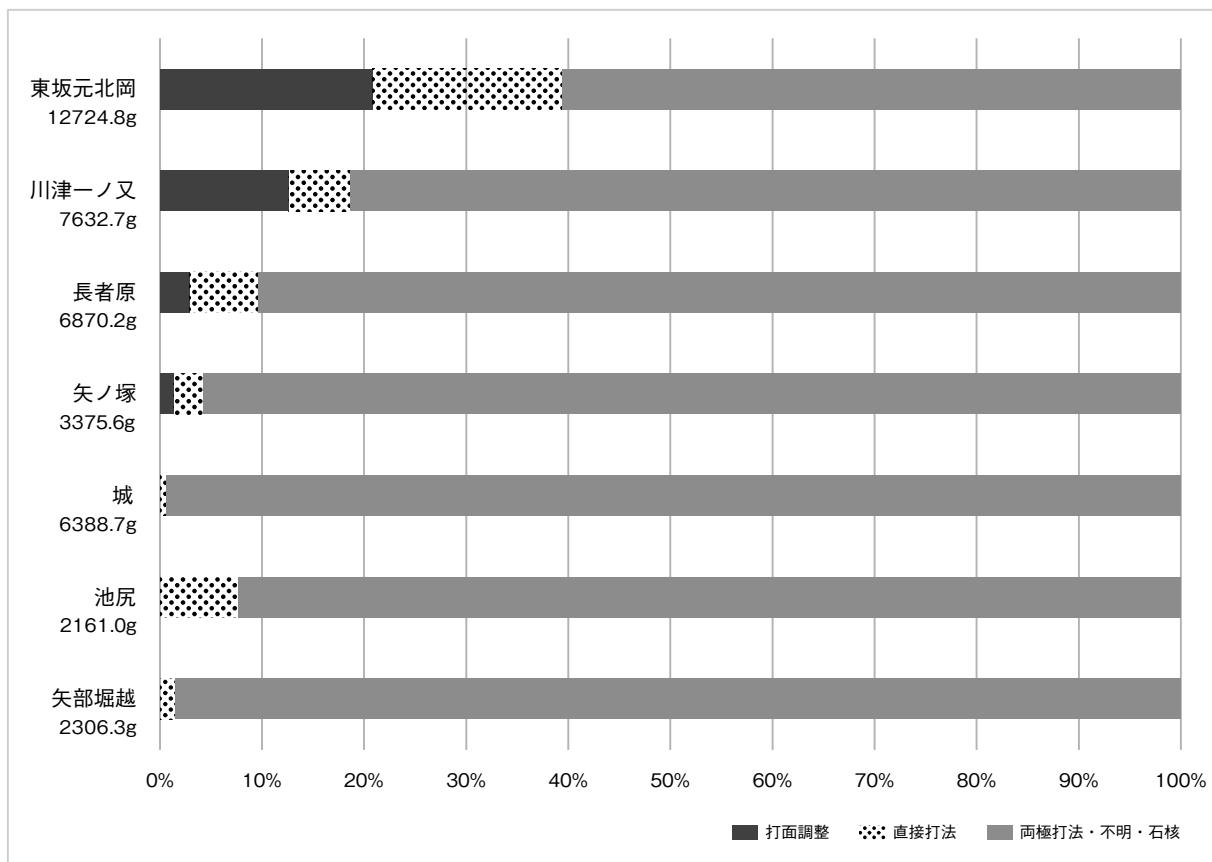
第47図 石器分類別重量比(11~50mm) 1

などに比べて重い（サイズが大きい）ためだろう。これに起因するのか、長者原遺跡における「成品」比率の少なさは重量分析のほうが顕著に表れている。ただ、矢ノ塚遺跡での「石核」、「成品」比率の高さ、長者原遺跡での「石核」がやや多い点は、数量分析の傾向と似ている。下段にいたっては、「打面調整」、「直接打法」、「両極打法」のサイズと重量に差がないためか、数量比較のグラフ（第46図下段）とかなり近い。

(2) 打面調整剥片と直接打法による剥片の比較

第48図は、これまで分析した丸龜平野の4遺跡に、備讃瀬戸北岸に位置する城遺跡、池尻遺跡、矢部堀越遺跡を加えたグラフである（註2）。このグラフでは11~50mmの資料についての「打面調整」、「直接打法」、「両極打法・不明・石核」の重量比を表している。

備讃瀬戸北岸の3遺跡では「打面調整」は確認できなかった。また、「直接打法」の比率は池尻遺跡が長者原遺跡に迫るもの、城遺跡や矢部堀越遺跡では矢ノ塚遺跡を下回る数%にしかすぎない。池



第48図 石器分類別重量比(11~50mm) 2

尻遺跡の評価は難しいが、他の2遺跡の状況を踏まえれば、備讃瀬戸北岸では金山型剥片剝離技術は用いられず、直接打法もさほど認められないと言えそうだ。

註

- 1 分析対象資料は保管資料の一部であるが、遺跡によっては1/2程度の資料を計測しており、おおまかな傾向は把握できると考える。以下に対象とした遺構名を記しておく。 東坂元北岡遺跡:SR01報告・未報告資料 / 川津一ノ又遺跡:SD59/100未報告資料 / 長者原遺跡:包含層未報告資料 / 矢ノ塚遺跡:SD85036・85101・85102・85124報告資料(1/2)・未報告資料 / 城遺跡:包含層と推測される未報告資料 / 池尻遺跡:倉敷市教育委員会調査南区包含層、南区搅乱 / 矢部堀越遺跡:包含層を中心とする資料
- 2 備讃瀬戸北岸の3遺跡については、各所蔵機関の協力を得て乘松が計測した。今回は「打面調整」、「直接打法」の剥片の抽出にとどまったため、「両極打法」、「不明」、「石核」は分類できておらず、一部「成品」が含まれる可能性も否定できない。

第4節 中継地としての東坂元北岡遺跡

1 遺跡の類型

本節では、第3節を踏ました他遺跡との比較から東坂元北岡遺跡の評価を試みる。

分析した8遺跡は、石器の分類やサイズ、比率などからa~fの類型に分けられ、原産地である金山との位置関係も念頭に置きながら、それぞれの性格を読み解いてみたい。